

平成30年度老人保健健康増進等事業

＜認知症サポーター等による認知症当事者本人及び家族にかかる
支援方策に関する調査研究＞

＜特定非営利活動法人ミーネット＞

認知症サポーター養成講座修了者が、より実地的な支援活動を継続するための仕組み作りに向けて「認知症サポーター養成講座修了者の現状意識調査」ならびに「がんのピアサポートなど患者・家族への支援活動(先行事例)における現状意識調査」を行い、それぞれの成果や課題、問題点について分析・考察するとともに、活動先行事例のがんピアサポーター養成内容と活動展開の仕組みを整理し明確化をはかり、本事業への応用の可能性についても探索した。

1) 認知症サポーター養成講座修了者の現状意識調査

対象者の調査において、そのニーズには「知識を得たい教養レベル」と「得た知識を活用して実践していきたい実践レベル」の二極化した傾向が存在していることが明らかになった。より具体的かつ実践的な研修を求める声も多く、段階ごとの効果的な実践者の養成のためには、知識を得た次のステップをどうするかが方策として重要であることが示された。

2) がんのピアサポートなど患者・家族への支援活動(先行事例)における現状意識調査

受講の目的は「がんの体験を活かした活動をするため」と回答した割合が高く、実際に活動することによって生きがいを感じていた。受講の満足度も高く、実践に即した内容であることが明らかになった。

3) 先行事例の有効性の検証

上記2)の調査対象が所属する団体が実施する「がんピアサポート活動」は、これまでの関係機関ならびにサポート利用者を対象とした調査結果から高い評価が得られており、ピアサポーターの養成研修内容ならびに活動満足度も高く、活動内容や活動の仕組みにおける有効性が検証された。

4) 本事業の調査研究等を踏まえた「がんピアサポーター養成モデル」の応用の可能性の探索

1)～3)の調査研究等から、認知症サポーターは、認知症当事者本人と家族への支援を区分けして、さらに認知症当事者の段階別にそれぞれの活動の仕組みの明確化をはかる必要性を提示した。その前提を国が示し、それを行政が受けて地域活動を支援する仕組みを、認知症サポーター養成講座修了者とともに構築していくことが活動の流れとして妥当であること、その方策として先行事例を参考にした実践型プログラムを開発し事業モデルを展開することを提案した。